

Pierre Fauchard

中 原 泉* 訳

訳 者 序 文

本編は、1923年夏に発行されたアメリカの有力な 歯科医学雑誌「The Dental Cosmos」8月号の、「論説欄 Editorial Department」の全訳である。同欄は、「Pierre Fauchard」と題した3頁半の短文で、署名はないが、おそらく、当時編集主幹だった Edward C. Kirk の執筆に由るものであろう。

同月号には、Fauchard 研究の第一人者 George Viau が、ソルボンヌ記念祭およびニューヨーク祝典で発表した有名な研究報告が英文で載録されている。

同欄は、この Viau 報告を体して、歯科医学史上における Fauchard の位置づけについて論及し、アメリカ国内はじめ全世界へむけて、Fauchard を世界の歯科医学のパイオニアとして評価したことを宣言した。

いわば、Fauchard 復活の声明文ともいえる、この歴史的なコメントを紹介する。

1922年12月16日パリのソルボンヌ大学において、最初の歯科教科書である Pierre Fauchard 著『Le Chirurgien Dentiste』の完成200周年を祝う特別会議が、厚生大臣 Paul Strauss 氏を大会会長として、パリの歯科医たちにより開催された。

この歴史的会議において Dr. George Viau は、Fauchard の生涯に関する非常に興味のある詳細な伝記を発表した。この発表のなかで彼は、Fauchard の生誕や死去の時期に関して、これまで判らなかった部分を明確に解き明かした。その内容は、この巻にすべて掲載されている。

最近のニューヨーク州歯科医師会年次大会において、Dr. B.W. Weinberger の歯科歴史に向けられた熱烈な関心によって、Fauchard の業績を祝うために同様の会議が行われた。

Pierre Fauchard

* Sen Nakahara: Nippon Dental University,
Niigata (日本歯科大学新潟歯学部)

この会議において著名な医学史研究家である Dr. J.J. Walsh により、最も興味ある Fauchard の伝記と Fauchard が医学領域に与えた影響について発表された。また Dr. Viau により Fauchard の原稿の発見について報告されるとともに、フィラデルフィアの Dr. Hermann Prinz によって、歯科医としての Fauchard の経歴が発表された。これらすべての発表も、この巻に掲載されている。

歯科医療を単なる生業から専門的職業へと向上させるために、Fauchard ほど大きな影響をあたえた人物は、歯科医学の全歴史を通してても他にいないだろう。

Fauchard が歯科臨床の実践をはじめたときには、歯科治療はほとんど独占的に床屋が行っており、インチキ治療が横行していた。彼は歯科臨床を実践していくにつれ、歯や口の疾患が全身的な健康に重要な関係があるということに強く印象

づけられるようになり、これによって彼は、歯科臨床を尊厳ある専門的職業へ向上させるよう努力することにした。

この理念に対する彼の第一歩は必然的に教育面に向けられ、専門的な治療術として歯科医学領域を概説するために、最初の真剣な試み、すなわち「Le Chirurgien Dentiste」の執筆が開始された。

Fauchard は彼の著作物のなかで、適切な臨床に関して彼の先駆者たちの記録が皆無に等しいことを嘆いている。そして彼はこのような事実が、歯科医学の発展に実質的な障害となってきたことを認識した。このような状況はすべての治療術と同様に、神秘と秘密が歯科臨床を取りまいていたという事実により容易に説明できる。

そして彼はつぎのような希望を表明した。すなわち、歯科を実践する人々や将来実践しようとする人々の利益のために、当時の歯科医学知識を記録することによって、歯科医学の発展を阻害するものを打破することが願いである、と。

彼の努力は著しく成功を収めたので、すべての歯科医学史家たちは、彼を近代歯科医学の父と見なしていると言うことができる。

Fauchard の初期の歯科教育は、Poteleret 氏の徒弟となることによって得られたものである。Poteleret はフランス海軍の軍医で、口腔を含む外科手術にかなりの経験を持っていた。Fauchard はこの初期教育に、40数年の経験と研究を加えた。これによって彼は歯科臨床のあらゆる層における詳細な知識を、彼の本のなかで説明することができたのである。

彼は文章を書く才能を有していたので、当時知られていたすべての歯科臨床の手法を、口腔および口腔内組織に起こる 103 の疾患についての症状学（診断学）ならびにその処置方式とともに、明確かつ簡潔に記録することが可能であった。

彼は歯科臨床に関係するものすべてについて豊富な知識を有していたが、このことは彼の論説中に含まれている領域の広さからうかがい知ることができる。彼の論説には 歯科手術学（治療学）、矯正学、外科学、移植学、歯槽膿漏症、口腔内状態と関連のある反射神経障害、歯科解剖学、病理

学、医用材料、金充填、義歯や充填物の製作方法が包含されている。

一言でいえば、彼の著作は当時の歯科技術についての知識を総合したものであった。歯槽膿漏症について彼はきわめてよく理解していたが、この疾患の症状学に関する彼の記述は歯科医学文献の古典となっている。専門家たちの間で古くからあるいは現在でも見解の相違があったり、議論の対象となっている数多くの問題について、Fauchard の書いている見解を読むことは実に興味深いことである。

たとえば、彼は全く明確に全身疾患と口腔あるいは歯の疾患との密接な関係を認識し、これらの症例が素晴らしい成功を収めた処置方法について数多くの例を列記している。我々の知る彼の膿漏処置は現在の原則と全く同じもの、つまり原因の外科的除去を基本としていた。

また Fauchard は熱心な口腔衛生の提唱者であり、今日我々が重要視しているのと同様に、口腔衛生についても充分認識していた。というのは彼は「歯の清掃にほとんどあるいは全く注意を払わなければ、一般に歯を破滅に追いやるすべての疾病の原因となる。」と言っているからである。

Fauchard は、歯の萌出により幼児に生ずる疼痛反射に非常に詳しく、そしてこれらの状態を緩和するために、彼は現在でも正説として受け入れられている処置方法を推奨している。この処置方法というのは、歯肉の切開である。彼はこの処置に関して切開の特徴についてさえも、今日行われているのと寸分変わらない指示を与えている。たとえば、切歯の歯肉切開においては、歯列弓と同じカーブを描くように単純切開を行い、臼歯については十分切開を行うと述べている。

彼の著書をよく読んでみると、素人たち（患者たち）はいくつかの治療に関し、現在でも Fauchard 時代の考え方からそれほど進んだ考えを持っていないと強く信じざるを得ない。妊婦や授乳期の母親たちの歯科保健について、Fauchard がどのように考えていたかを述べるだけで、現在と当時の患者たちがあまり変わらないということが判る。

彼は妊娠中の抜歯に対する偏見や歯痛に対する注意について、つぎのように述べている。不眠の苦痛が長びけば母親には流産や早産が起こるであろうし、授乳期の幼児にとっては母親に代って代用ミルクを与えなければならないようになる。このような苦痛を長びかせることによって生ずる害や危険を避けるためには、いかなる必要な手術も早急に行うべきである、と。

このように歯科医療は現在でさえ、専門的職業として歯科が始まった時代から存在しつづけてきた偏見に対して苦しんでいると言えよう。

不思議なことであるが、彼の本はドイツ語に翻訳されているけれども、英語には訳されていない。しかしながらその内容は、国や人種を問わず、当時歯科臨床を行っていた人々に知られるようになり、強い影響をあたえた。

この号に口絵として掲載されている Fauchard の写真を見ると、彼は非常に威厳ある容貌をもった人物であったことがうかがわれる。また家族の歴史的記録をみると、彼は経済的にも成功をおさめ、パリにある豪壮な館 Grand Mesnil に住んで、当時の上流階級にまちがいなく出入りしていたことがわかる。

Fauchard の職業上の活動に関する全記録は、歯科医学の向上と前進のために払われた非利己的な努力の人生であり、彼はフランスおよびこのアメリカで賞讃をうけるに価する人物である。また彼の業績は、歯科医学に従事する人々に最も高く感謝されるものである。

(翻訳に際し、適切な助言をいただいた 本学の 小倉英夫助教授に深謝します。)